



台風14号による農業被害状況

9月17日南鳥島の南東に発生した台風14号は9月22日から23日にかけて小笠原父島、母島の近海を通過し、父島における観測史上2番目となる最大瞬間風速58.8m/sを記録しました。

各所でも多くの被害をもたらしましたが、そのなかでも農業への被害は甚大なものとなりました。調整中ではありますが、作物の被害は約3000万円、農業施設では2100万円、その他300万円の計5400万円の被害金額となっております。

作物の被害では、露地栽培を中心にほとんどの作物が致命的な被害を受けておりました。バナナやパイア等の多くは倒木し、特に収穫期を迎えていた柑橘類の多くは、その殆どの果実が落下し、被害を免れることができませんでした。このことは、収穫を楽しみにしておりました消費者にとっても大きな損失となっております。



バナナの落下

また、マンゴーなども含めた果樹類の枝葉がちぎれたり、倒木等により、今後の生育や来期に向けての収穫が心配されます。

農業施設では母島での被害が大きく、鉄骨ハウスの一部が大きく破損したり、パイプハウスでは崩壊に至った施設も見受けられました。

過去、昭和58年にも甚大な災害があったことは聞いてはおりましたが、私自身もこのような台風に遭遇した経験はありませんでした。

また、台風14号の復旧がままならぬ矢先に台風18号が追い討ちをかけるなど、多くのご苦労とご心労をお察しいたします。

農業への被害は甚大なものとなりましたが、被災されました皆様には、負傷された方がいなかったことは何よりの心の救いでもあります。心からお見舞い申し上げますとともに、早期復旧を願っております。



蝙蝠谷農業団地

<産業課長：小泉>

園芸教室と農業者セミナーを開きました

「村民だより」でもお知らせしていますが、農業センターでは今年度より一般島民の皆さん向けに「園芸教室」を、また、若手農業者向けに「農業者セミナー」を企画しました。



園芸教室は、4月の「科学技術週間」に合わせて昨年からはじめた施設公開の時に、イベントのひとつとして開いたものです。そのときの参加者からは、「これからも続けて欲しい」「講義だけでなく実技もやって欲しい」という声がありました。そこで、今回これらのご要望に応えるため開催を企画しました。第1回目は、8月26日の10時から11時半にかけて行われました。当日は、老若男女14名の園芸愛好家が参加しました。前半は、農業センター研究員がパソコンを使い、「マンゴー栽培の勘所」といった内容の講義を行いました。「繁殖の仕方は？花を咲かせるためには？実を着けさせるためには？大きな実を穫るには？剪定は？」などの疑問を写真や図を使って説明しました。その後、参加者の皆さんからの質問を受けましたが、非常に活発なやりとりがなされ熱意が伝わるものでした。

後半は、いよいよ実習です。栽培現場に移

動の途中で、種子のは種から台木の育成の説明の仕方、そしてベテランの現場職員による接ぎ木の実演を見てもらいました。その熟練の技に皆

さん感心しきりの様子でした。さて、マンゴーの栽培施



設に着くと、幼木の場合や成木の場合の剪定などの管理について一通りの説明をしました。また、農業センターには「根域制限栽培」と「慣行栽培」という2通りの木があり、それぞれの栽培方法でも剪定などの管理に違いがあることを見てもらいました。実技として、実際にマンゴーの木を剪定してもらいました。最初は皆さんおそろおそろ枝の先をチョン、という感じで切っていましたが、だんだん慣れてくると、センター職員の“あおり”もあって、かなり太い枝までバッサリ落とすまでになりました。前半の講義でも強調した、マンゴーの剪定の基本は「1節のこし」を実地でやる難しさを体感できたのでは



ないでしょうか？ワイワイやっているうちに時間が来ました。最後に、センターで穫れた完熟のマンゴーを味わって頂きながら、本日の園芸教室を終えましたが、なお去り難い方が数名残り話は尽きないようでした。次回は10月29日に、レモン栽培についての教室を予定しています。

一方、**農業者セミナー**は、父島では「ふたば会」、母島では「小笠原農業振興研究会」という若手農業者の集まりの要望に応えるものとして企画しました。農業に関する知識を系統的に学び、技術の向上を図ることはもとより、今後の小笠原農業の方向性を考える場にできればと考えています。父島では7月からはじめ「植物生理」を、8月からは父・母両島で同時に「土壌肥料&熱帯果樹各論(マンゴー)」を行いました。講師は農業センター研究員がそれぞれ分担し務めます。現在のところ、受講生は父島で6名、母島で5名となっています。受講生は、テキストに基づいた講師の説明を受け、その後疑問点を出し合い、討議形式で学習していきます。「継続は力なり」ということわざがあります。是非、続けていって欲しいものだと思いますし、農業センターでは今後も支援を惜しまないつもりです。



<農業センター所長：小谷野>

//訂正とお詫び//

前号(No.65)「柑橘類に発生するサビダニ」の記事で、柑橘類果実にサメ肌症状を引き起こす原因として、これまで日本で知られていない「カンキツサビダニ(仮称)」とお知らせしました。ところが、ニュース発行後、同定を依頼していた研究者から同定結果の変更の知らせが届きました。変更後の種名は「リュウキュウミカンサビダニ」です。訂正し、お詫びいたします。本種は数年前まで、国内では沖縄と奄美大島での発生が報告されていました。近年、鹿児島県本土に進出し県内全域で発生が確認され、さらに隣接する熊本や宮崎にも広がる勢いを見せているそうです。海外ではエジプトでの発生が報告されています。いずれにせよ、非常に小さなサイズ(体長0.1-0.2mm)であることに加え、専門家の数も少ないため、正確な分布状況などは不明のようです。防除については、前号でお知らせした剤も使用できますが、今年7月にはコテツフロアブル剤が登録されました。農業センターでも効果を確認していますので活用して下さい。 <小谷野・小野>

農薬適用拡大情報

9月20日付けでマンゴーに農薬適用の拡大がありました。防除の参考にしてください。

適用作物名	: マンゴー
対象病虫害	: ハダニ類
農薬名	: マイトコーネフロアブル
倍率	: 1000倍
使用日数	: 収穫7日前まで
使用回数	: 1回
使用量	: 200~700 ^μ g/10a

<小野>

子牛を上手にそだてよう

小笠原の子牛は、内地の子牛と比較すると評価が低いことはご存知のことだと思います。標準的な体格と比較すると小笠原産の子牛は小さいことが大きな理由です。離島である不利的条件があるものの、ちょっとした努力でもっと子牛の品質を向上させることができます。

1) 分娩後から哺乳中のポイント

分娩後、子牛は親牛から抗体をもらうため、初乳を直ちに与える必要があります。子牛が飲みたがらないときや、親牛が嫌がる時は飼いが乳を搾って子牛に与える必要があります。

日常の親牛の哺乳状況をよく観察します。子牛に母乳をたっぷり与えているか観察します。母乳を生産するのは、親牛にとって大変エネルギーを必要とします。母乳の量は、分娩後1ヶ月目がピークです。親牛の栄養状態を観察して痩せすぎにならないように飼料を加減します。

親牛は普段愛情豊かに子牛の面倒を見ていますが、餌のことになると話は別です。子供のために与えたつもりが親に食べられてしまっていることもよくあります。そこで、牛小屋に子牛だけが入れるスペースを作り、子牛用の餌や水を与えるようにします。これが「別飼い」です。餌付け用など高カロリーで高タンパクのものや、やわらかそうな乾草を与えます。

子牛は意外と早くから固形物を口にします。親の食べている姿をみて物まねするところから始まります。生後2週間ぐらいで反すうし始めます。

2) 4ヶ月齢以降の管理

離乳により子牛は親牛から離れ、餌を食べて育ちます。よい粗飼料(青草や乾草)をたっぷり与え

ます。子牛は、親と比べるとはるかに美食家です。草は柔らかい穂先を好んで食べ、硬い茎の部分は残します。また、濃厚飼料も唾夜などで傷んでくると食べ残します。子牛が食べた量がどの程度だったのか、きちんと把握しておくことが重要です。

3) 下痢に注意

また、子牛の商品価値を下げるもうひとつの要因は、下痢の発生です。冬期の西風が子牛に当たらないようにしたり、牛舎の清掃を行うなど衛生面に注意し、早期に発見し電解質補液など手当てをすることが重要です。

アメリカ産牛肉の輸入再開に伴い、肥育農家では、より高品質な肉質をめざすため、素性のよい子牛に対する需要が増すと思われます。良品と、すそ物の枝肉の価格は、ますます差がつかます。

発育のよい子牛生産を心がけて販売価格を上げましょう。

約8ヶ月での平均体重と価格 平成18年4月以降出荷

	小笠原		標準体重と価格*	
	体重 kg	価格	体重 kg	価格
去勢	226	28万円	286	51万円
	174	21万円	208	45万円

*標準体重は8ヶ月齢、価格は子牛市場の7月の平均価格



< 畜産指導所長: 舩屋 >

南海の楽園小笠原の発展を願って(その1)

3月に先進地視察研修でお世話になった沖縄県石垣市で農業を営んでおられる花谷達郎氏から、小笠原農業への思いを寄稿して頂きましたので紹介します。

南海の楽園小笠原の発展を願って

石垣市在住 花谷達郎

小笠原から得たもの

私が東京農大を卒業した年は、ちょうど小笠原が日本復帰を果たした年でもありました。南の島に住みたいと思っていた私は、何のつてもないまま小笠原行きの船に乗り込み、母島に渡りました。島は工事関係者が多く、私もダンプの運転手や賄い仕事などをやりながら母島での生活が始まりました。

半年ほどして、私が農大卒だと知った徳井さんから声がかかり、農業の手伝いをさせてもらうことになりました。30年間放置された畑は荒れ放題で、ギンネム林になっていたところをブルドーザーで開き、大型トラクターで整地し、残ったところをクワで耕して畑に戻していきました。長年耕作されず肥沃になっていた土地では、カボチャ、スイカ、メロン、ジャガイモ、キュウリ、ナス、トマトなど、どれもおもしろいように良くできました。農業の楽しさ、豊作の喜びを味わい、早朝から日暮れまで夢中になって働いた日々でした。

当時、もっとも驚かされたのは稲垣行正さんの身を粉にして働く姿でした。いち早く開墾のため帰島して3坪のプレ

ハブに一人で住み、夜明け前から懐中電灯を持って畑に行き、夜が白み始める頃には畑を起こしておられました。畑の隅で飼っていた数頭のヤギはいつも山のような堆肥の上に乗っていました。畑で獲れる作物はどれも素晴らしく、農に対するスピリットを稲垣さんから学んだように思います。

戦前栄えていた母島の農業を取り戻そうと、島に戻って来られた元島民のみなさん、徳井さん、稲垣さん、浅沼さん、小松さん、折田さん、50代になつてなお、農民魂の情熱に燃える方々に出会えたことは今も私の心の糧となっています。母島にいたのは3年ほどでしたが、私の人生の中で最も充実し、無我夢中に過ごした年月でした。

戦前は農家の一年の収入で大きな家が建ったという話を聞いていたので、今後ますます農家の所得が向上し、戦前のような活気ある島になっていくのだらうと思いました。

その後私は、自営するために農地を求めて母島を離れ、石垣島に渡りました。

30年ぶりの小笠原

小笠原農業の振興にご尽力された小松さんや徳井さんご夫妻が亡くなり、行正さんが体調を悪くされたと聞き、いてもたってもいられず私は30年ぶりに小笠原を訪れました。

竹芝棧橋から父島へ向かう船の中で、農大の先輩の内海さんと偶然一緒になりました。彼は尾瀬の自然保護の活動を

しており、小笠原が観光客の増加と共に自然環境が壊れることのないように、自然保護についての公演を依頼されての渡航でした。長い船旅だと思っていたのですが、思いがけず楽しい時間を過ごすことになりました。

父島では、小笠原三度目の赴任で最後の教員生活を迎えられた長島先生のお宅に泊めていただき、旧交を温めることができました。

母島に上陸した最初の印象は、プレハブしかなかった元地に住宅が建ち並び、道路が広く舗装され、立派な集落となっていることでした。当時は開拓の男ばかりで島には若い女性は看護婦さんと学校の先生しかいませんでしたが、青年だった人達が皆世帯を持ち、次の世代が後継者として育てていることに時の流れを感じさせられました。

田沢さんの案内で島中の畑を見て回りましたが、復帰当時の活気はなく、作目もバラバラで統一感がなく、きちんと管理されている畑が見当たらないことに少しがっかりしました。ただ一ヶ所、パラグアイから来られた方の畑だけが良く手入れされている感じでした。

そんな中、住宅の庭などに柑橘類が大きく育っていることと、折田さんからおみやげに頂いたレモンとマーマレードが今後の小笠原の農業の方向性を示しているように思えました。

防風林の整備と傾斜地の利用

昨今、石垣島も異常気象で、台風が6月に上陸したり12月に襲来したりするなど、以前とは変わってきているよ

うに思います。昨年は開花期の長期低温でマンゴーが8割減の不作となり、長雨、集中豪雨、干ばつなどで農作物に悪影響を及ぼしました。2003年には最大瞬間風速74メートルを越す大型台風が宮古島を直撃し、コンクリート電柱が軒並み倒れ、鉄骨ハウスが倒壊するという大変な被害を受けました。この被害の調査を熱研の小沢聖さんが現代農業(2005年8月号)に報告していましたが、改めて防風林の重要性を痛感いたしました。

去った2月に小笠原の青年たちが亜熱帯農業センターの佐藤澄仁さんの引率で石垣島へ農業視察に来られました。その時に金城哲浩さんのマンゴーハウスの周りにイスノキとイヌマキの防風林が植えられているのを見たと思います。イスノキもイヌマキも実生でよく増やせるものなので、もし母島に自生しているのならば、イヌマキのほうが直根性なので防風林としては良いのではないかと思います。1メートル位になるまでポットで育て、定植後3年ほど除草・肥培管理をうまくやれば防風林としての形になっていきます。

また、急傾斜地の多い小笠原では、レモンや小笠原オレンジなどの柑橘類を中心とした果樹栽培に移行したほうが良いと思います。小笠原と同緯度で山の多い沖縄本島北部はシークワサーヤタンカンの産地になっています。

(後半はセンターニュース次号で紹介します。)